

図書館 forum

図書館と私	末 信一郎	1
医の物語	佐野 和生	3
■福井大学附属図書館所蔵の古典籍(11)		
『 <small>くふうしんわ</small> 颯風新話』		
——大野藩の洋学者が翻訳した航海術書——	膽吹 覚	5
■福井大学附属図書館所蔵「小島家文書」を読む(4)		
旅に出る人びと、村を去る人びと		
—貞享2(1685)年、他国出国者の記録から—	長谷川裕子	7
■私の推薦書		
人としての成長に興味をもとう!	繁田 里美	10
驚異のエピジェネティクス		
～遺伝子がすべてではない!? 生命のプログラムの秘密～	沖 昌也	11
無知の知		
Scio quod non scio. I know that I do not know. …	坂田 登	13
総合図書館企画展示 2016		15
医学図書館日記		17
「英語論文作成支援コーナー」を		
医学図書館1階 福井県医学資料室の一角に設けました!		20
平成28年度教員寄贈図書		21
主な行事等		22

図書館と私

附属図書館長 末 信一郎

すえ・しんいちろう

図書館の変革が叫ばれて久しいものがあります。本学附属図書館でも総合図書館、医学図書館両者ともに耐震基準の見直しのため大幅な改装工事を行いリニューアルしたのがつい最近のことのように思えます。その時は、私も図書館がこうあるべきだという旧来の図書館のイメージが強すぎて、図書館の1階部分で飲食もできることに驚きと戸惑いを感じたものです。今回は、私の図書館歴を振り返り、そして今の図書館を論じてみたいと思います。そもそも大学図書館と私の出会いはその時代の学生と同じように大学入学と同時でした。簡単なオリエンテーションなどを受けた記憶がかすかに残っているような気がします。二次資料って何だろうと思ったこととか、個人の学習スペースなどが新鮮だった覚えがあります。ネット情報などない時代ですから年鑑などの大型資料本などはレポート作成の時にはお世話になったものです。

文学の先生に誘われて図書館主催の読書会にも参加したことがあります。そのうち学年が進行するとケミカルアブストラクトという2次資料を引くのが仕事になりました。言うなれば手作業による文献検索ですが、目当てのものにたどり着くのに1時間くらいかかることもあり、今のオンラインでの検索システムでは考えられない労苦でした。目的のものが見つかる次は書庫に行って現物を捜し、さらに分厚い資料を歪まないようにコピーするにも一苦勞でした。歪まないでコピーできる装置が導入された時は驚きとこのような装置を導入してくれた図書館に密かに感謝したものです。実験の合間をぬって「合宿」と称して図書館に半日くらい籠るのは気分転換もあり楽しくさえ感じられました。かくいう私も本学に着任してから10年位は従来と同じような図書館との関係でしたが、電子ジャーナル導入以来、ほとんど来館することは



本学総合図書館に収蔵されているケミカルアブストラクト。バックナンバーは工学部前身の福井高等工業学校創立時まで遡ることができます。



私の愛読書「平和の礎」。総合図書館の閉架にあります。

なく、ごくたまに「平和の礎」というシリーズ本を閉架に借りに行くだけとなりました。しかし、このシリーズの発刊が終了すると全く図書館に行く理由が無くなり、図書館長となるまで長い間、来館したことがありませんでした。電子ジャーナルやオンライン検索システムが当たり前の今の研究室の学生諸君は図書館に来館する意味も持たないだろうし、学生にとって、図書館とはどのような位置づけなのかなと考えてしまいます。

また最近ではエドテック (EdTeck) という新しいツールが出てきました。エドテックとは「教育」と「技術」を組み合わせた造語で、オンラインを活用した最先端の教育サービスです。

先日 NHK の番組で、このエドテックが紹介されていました。エドテックを駆使した米国のミネルバ大学では、まだ卒業生も出ていないような新設校ですが、その講義の在り方に魅了された優秀な学生達がケンブリッジ大学などの既存の有名校を振って入学してきています。学生寮は存在するが、大学としての付帯設備をほとんど持っていないように見えるこの大学に果たして図書館はあるのだろうか、必要性はあるのだろうかと考えてしまいました。時代は急速に変化しているようです。これから、大学図書館の在り方、役割がどのように変わっていくのか時代を先取りして考えていかなければならないと強く感じているこの頃です。

(工学系部門繊維先端工学分野 教授)



ミネルバ大学のInstagramのページ。学生の自由闊達な様子がうかがえます。

医の物語

医学図書館長 佐野和生

さの・かずお

物語にはさまざまなジャンルがあるが、その一つに医を題材としたものがあり、根強い人気を保っている。今回、誌面をお借りして医を題材とした物語に触れてみたい。

解体新書の訳者として有名な杉田玄白は、小浜藩医師であったことが知られている。「冬の鷹」¹（吉村 昭著）は、解体新書の翻訳から出版過程、杉田玄白と同時に翻訳に携わりながらも訳者として名前が記されなかった前野良沢との相克が描かれている。

「華岡青洲の妻」²（有吉佐和子著）は、世界初の全身麻酔による乳癌手術に成功した紀州の外科医 華岡青洲と彼を支えた妻と母の物語である。

「雪の花」³（吉村 昭著）は、医学図書館ホールに展示説明されているように、多くの人命を奪う伝染病である天然痘に対し、苦労の末持ち帰った種痘の苗で闘った福井藩の町医 笠原良策（白翁）の物語である。

吉村 昭著の「ふおん・しいほととの娘（上下）」⁴は、オランダ軍医シーボルトの娘、お稲の生涯について描いたもので、日本人女性で初めて産科医として西洋医学を学んだとされている。渡辺淳一著の「花埋み」⁵は、医術試験に受かった日本で初めての女医 荻野吟子の物語である。

「夜明けの雷鳴 医師 高松凌雲」⁶（吉村 昭著）の主人公は、幕府の随員として渡欧し、フランスの医学校兼病院で学んだ後に帰国し、箱館戦争に身を投じ、その後同愛社という民間初

の貧民救護施設を創設した人物で、日本の赤十字運動の先駆者とされている。

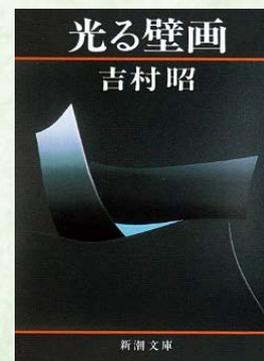
「白い航跡」⁷（吉村 昭著）は、薩摩藩軍医から海軍軍医となり、英国に留学した後、英国式医学を日本に定着させた高木兼寛の物語である。その業績のひとつに麦飯による脚気の予防があり、明治時代の記述も相まって興味深い。

明治時代の細菌学者 北里柴三郎については、福井市出身の作家 山崎光夫による「北里柴三郎－雷と呼ばれた男」⁸に詳しい。破傷風菌の発見、学閥との闘いなど波乱に満ちた人生を知ることができる。

「まぼろしのノーベル賞－山極勝三郎の生涯」⁹（神田愛子著）は、ウサギの耳にコールドールを塗り続け、化学物質による発がんの世界で初めて成功した病理学者について書かれている。

最近の内視鏡器具や手術の進化は著しく、手術適応も拡大の一途を辿っているようである。その端緒となる「胃カメラ」の開発を描いた小説に、吉村 昭著の「光る壁画」¹⁰がある（図1）。世界に先駆けて日本で開発された「胃カメラ」は「胃の中を自由に見たい」という外科医の信念とそれに応える技術者によって産みだされたもので、開発にかける情熱、苦労や創意工夫が克明に描かれている。

次に公害に関する書



（図1）

籍を見ると、日本においては四大公害病として水俣病、新潟水俣病、イタイタイ病、四日市ぜんそくが挙げられている。このうち、工場排水による有機水銀中毒である水俣病については、常に患者側に立って支援を続けた原田正純医師に関する書籍「よかたい先生 水俣から世界を見続けた医師 原田正純」¹¹（三枝三七子著）に詳しい（図2）。児童向けに書かれた本であるが、教えられることが多い。文中の『貧しさを何とかしないと、公害はなくならん』は日本だけでなく、世界の公害を調査した原田医師ゆえの言葉である。また、『障がいをもって生まれたことが、決して不幸ではない』からは、見守ってきた暖かな人柄が感じられる。一



(図2)

方、患者側の視点からは、石牟礼道子が「苦海浄土」¹²を著して、併せ読んでみたい。

北陸の富山県を流れる神通川は、現在は緑の水面が美しくカヌー競技や釣りが盛んに行われている川である。しかしながら、過去には神通川流域で「奇病」が発生し、その症状からイタイタイ病と呼ばれていた。萩野 昇医師らによる調査で工場廃液に含まれるカドミウムによる病であることが判明し、多くの人々の助力を得て、企業に公害であることを認めさせた。その経緯については、「新版 死の川とたたかうイタイタイ病を追って」¹³（八田清信著）に記載されている。

他にも多くの書物が出版されていますが、手取りやすい文庫版を中心に紹介しました。医学図書館内に展示いたしますので、興味を持たれた方はご一読いただければと思います。

（文中敬称略）

（医学部感覚運動医学講座歯科口腔外科学 教授）

No.	表 題	著 者	出版社	文庫化
1	冬の鷹	吉村 昭	新潮社	○
2	華岡青洲の妻	有吉佐和子	新潮社	○
3	雪の花	吉村 昭	新潮社	○
4	ふおん・しいほととの娘（上下）	吉村 昭	講談社	○
5	花埋み	渡辺 淳一	新潮社	○
6	夜明けの雷鳴 医師 高松凌雲	吉村 昭	文藝春秋	○
7	新装版 白い航跡（上下）	吉村 昭	講談社	○
8	北里柴三郎－雷と呼ばれた男（上下）	山崎 光夫	中央公論新社	○
9	まぼろしのノーベル賞－山極勝三郎の生涯	神田 愛子	国土社	
10	光る壁画	吉村 昭	新潮社	○
11	よかたい先生 水俣から世界を見続けた医師 原田正純	三枝三七子	学研教育出版	
12	新装版 苦海浄土	石牟礼道子	講談社	○
13	新版 死の川とたたかうイタイタイ病を追って	八田 清信	偕成社	○

福井大学附属図書館所蔵の古典籍(11)

『^{くふうしんわ}颶風新話』——大野藩の洋学者が翻訳した航海術書——

国際センター准教授 膽 吹 覚

いぶき・さとる



第1冊の扉と角葉(方位板)2枚

「^{くふう}颶風」とは、台風などの暴風のことである。『颶風新話』は暴風に関する知識とそれに対応するための航海術を述べた書物である。本書はオランダ人 S.van Delden がオランダ語に翻訳した『Gesprekken over orkanen』—その原書はイギリス人 Henry Piddington の著書—を原書として、日本の越前国大野藩の洋学者であった伊藤慎蔵が日本語に重訳したものである。

本学総合図書館郷土資料室所蔵の『颶風新話』

(H023-ITO-1・2) は半紙本の版本である。2巻2冊。2冊ともに題簽が剥離していることが惜しまれるが、^{はなだ}縹色唐草繫模様の表紙に光沢のある^{みる}海松色の^{かど}角裂を付した瀟洒な装丁である。

内題は「颶風新話」。第1冊巻頭に「颶風新話序」(安政4年5月、杉田成卿)、「颶風新話序」(安政3年11月、緒方洪庵)の2篇の序文を置き、その後に「颶風新話凡例」(伊藤慎蔵)、「颶風新話目録」を収める。本文は四周単辺無界、半丁10行。本文は漢字

ひらがな交じり文(ただし、外来語はカタカナ表記)。版心は白口単黒魚尾に「颶風新話／第一回(回数)一(丁数)／槌鈍軒蔵」。上巻88丁、下巻94丁。下巻末尾に「颶風新話跋」(安政4年5月、内山良隆)を置く。下巻末に刊記はなく、上下ともに後表紙見返しは白紙である。印記は「大野藩洋学館図書章」「稟準刊行」「高鳴文庫」「福井大学図書之印」の4種である。

本書第1冊第1丁の扉(洋書の Title-page に相当する)は薄紅色の紙で、四周双辺の枠内に「緒方章公裁閱・伊藤慎君独訳 全部二冊／颶風新話 図並角葉 附刻／大野 槌鈍軒蔵梓」と記されている。

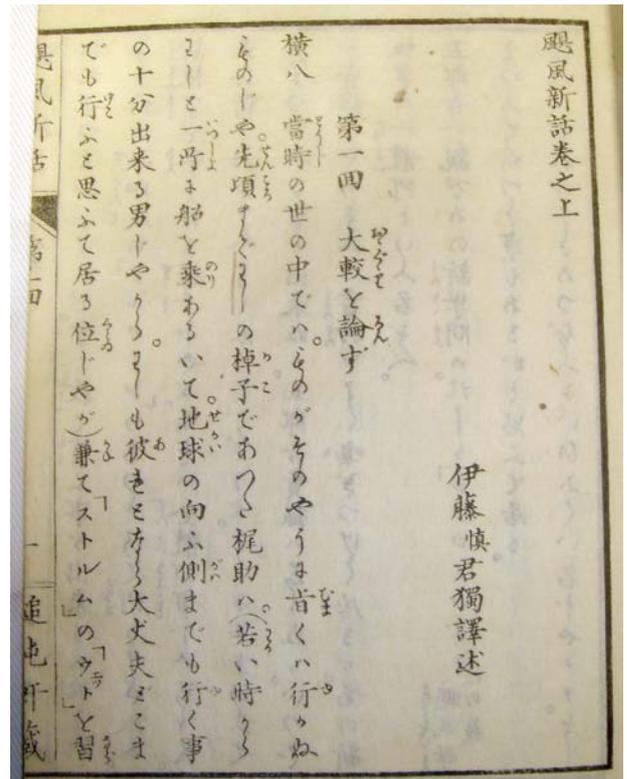
校閲者の緒方章は、江戸後期の蘭学者、緒方洪庵である。洪庵の諱は章、字は公裁といい、洪庵はその号である。洪庵は大坂に蘭学塾、適々斎塾を開き、医業の傍らに蘭学を教授した。彼は牛痘種痘の普及に尽くし、安政5年(1858)のコレラの大流行には治療に奔走した。

翻訳者、伊東慎蔵は長門国(山口県)萩に生まれ、大坂に出て、洪庵の適々斎塾で学んだ人である。安政2年(1855)、師洪庵の推挙により越前国大野藩藩校に赴任し、翌3年(1856)5月に創設された洋学館の初代教授となる。

扉に記された「角葉」は方位板のことである。本書には北半球用と南半球用の2種の航海用の方位板が付録されており(写真参照)、上巻表紙見返しの小袋に収納されている。こうした付録品が揃っていることも書痴には嬉しい。

本書は扉と版心に「槌鈍軒蔵」とあるので、その版元は訳者である伊藤慎蔵の伊藤家であったことが知られる。槌鈍軒は慎蔵の号である。『颶風新話』が刊行された同じ年に、大野藩は『英吉利文典』を出版しているが、こちらは「大野文庫蔵版」と記されており、その蔵版者は大野藩である。

近世の和本の版本であれば、その巻末或いは後表紙見返しに刊記または奥書を置くことが一般的である。しかし、上述の通り、本書にはそれがない。その代わりに本書の扉の欄外上部に「安政四年六月新



鑄」と記載されている。安政4年は1857年である。書物の扉に書名や筆署名、出版年月、出版社名を記載する方法は、洋本では一般的である。『颶風新話』は和本であるが、原書とした蘭書の装丁の影響を受けて、出版年をその扉に記載したのであろう。

大野藩は小藩であったが、藩主を中心に洋学が興隆し、越前国内はもとより加賀国大聖寺や美濃国赤坂、丹後国宮津などから多くの学生が訪れたという。当時の大野藩は財政が逼迫し、その打開策として、蝦夷地開発と海上貿易に活路を見出そうとしていた。大野藩は山間地にあったが、九頭龍川を下って日本海に通じていたのである。航海術を扱った『颶風新話』の翻訳・出版も、こうした大野藩の政策のもとで行われたものと考えられる。

大野藩の洋学については、岩治勇一「大野藩における洋学教育について」(第8回蘭学資料研究会大野大会特別講演、昭和41年)が詳しい。また、大野藩藩校旧蔵本は現在では福井県立大野高校に移管されており、それは『大野藩等旧蔵図書目録』(昭和55年)として報告されている。

福井大学附属図書館所蔵「小島家文書」を読む(4)

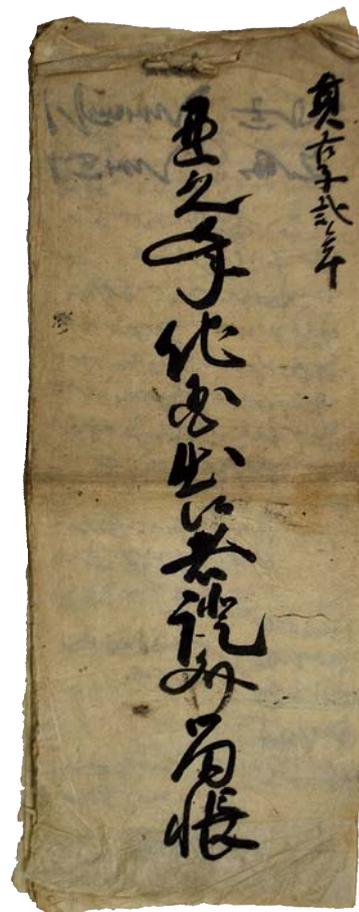
旅に出る人びと、村を去る人びと—貞享2(1685)年、他国出国者の記録から—

教育学部社会系教育講座准教授 長谷川 裕 子

はせがわ・やすこ

江戸時代の半ば、17世紀も終わりの頃になると、死と隣り合わせの世界から解放された人びとは、百姓の「家」の相対的安定化を背景に、現代社会に生きるわれわれと同じように「自分のため」の旅に出るようになる。もちろん、江戸時代以前にも、商人や宗教者、さらには百姓までもが、生業や生活に必要な物資を調達するために諸国を巡っていたし、また村で食えない人びとが、居村から「欠け落ち」して移住することも頻繁にみられた。しかし、幕藩権力によって百姓の欠け落ちへの対策が講じられ、村への定住も進みつつあった江戸時代の半ばの頃になると、経済的に余力のついてきた百姓を中心に、多くの人びとが短期間の移動を行うようになる。福井大学附属図書館に所蔵されている「小島家文書」には、そうした江戸時代の人びとの移動に関する文書が数多く残されている。これらの文書から、江戸時代の人びとの生活や娯楽の世界をのぞいてみよう。

「小島家文書」を伝えた小島氏は、代々「野中組」の組頭として、小島氏の居住する野中村を中心とした周辺18ヶ村の取りまとめ役を担っていた。そのため、野中組に属する村の人びとがどこか他国へ移動する場合には、各村の庄屋・長百姓等を通じて小島氏のところに届けが出されることとなる。なかでも、「丑之年他国出候者証文留書」(以下、「留書」と略す)には、貞享2(1685)年3月から同3年7月までに越前国外に一時的に出国した人びとの移動届がまとめて綴られている(3204号文書。以下「小島家文書」については目録番号のみを示す)。綴られた移動届はどれも概ね同じ様式で、移動する人の



貞享2(1685)年
「丑之年他国出候者証文留帳」(No.3204)

名前・行き先・期間が記され、もし他国にそのまま居留し、または旅先で病気になって居村に帰れない場合には、庄屋・長百姓と相談の上、請人(保証人)となっている村の者が現地まで迎えに行くことが誓約されている。

「留書」に記されている旅の目的は、大きく二つに分けられる。商売あるいは生業のための旅か、ま

たは参詣や湯治など娯楽のための旅か、である。前者には、越中（富山県）・能登（石川県）・越後（新潟県）に期間およそ1～2ヶ月で「駒買」「馬買」に行った中番村と玉江村の百姓が確認できる。なかでも中番村の曾平は、貞享2年3月と5月、同3年3月に越中・能登へ買い付けに行っていることから、馬を扱う商人であったと推測できる。江戸時代においては、武士階級だけではなく、耕作や荷物の運搬のため、百姓が馬を使役する機会も拡大し、その需要は拡大していた。これらの馬は、他国からもたらされることもあれば、馬を多く所持する下番村の百姓が他国に馬を売りに行っているように（1512）、越前から他国に移出されることもあったようである。その他、商売のために大坂へ行った商人や、「はかせ舟」（廻船）に乗って松前まで下った水主の移動届も「留書」には残されている。

一方、後者については、白山・立山や京都への参詣、そして山中温泉での湯治を目的とした旅の届けが出されている。社寺参詣については、貞享2年7月18日から晦日の日程で、宮前村・中番村の百姓4人のグループと、藤沢村の百姓2人のグループが白山詣を申請しているが、両グループとも村を出発して加賀に入り、白山に登ったあと越中立山まで足を伸ばしている。いまでも北陸の観光地として人気の高い立山は、江戸時代の人びとにとっても娯楽の場であったことがわかる。また、山中温泉を訪れた轟村の百姓の旅の目的は病気療養であったが、後述するように、村の女性も多く山中や加賀温泉を訪れていることから、いつの時代も変わらず、温泉めぐりは人びとにとって数少ない癒しのスポットであったことがうかがえよう。さらに、京都への旅のほとんどは本願寺詣である。17世紀の終わり頃には、百姓の社寺参詣が流行するが、なかでも人気が高かったのが伊勢神宮と本願寺であった。浄土真宗の寺院が多い越前で、しかも勝山藩が「伊勢や本願寺に参詣したい者は遠慮なく庄屋に願い出て関所通行手形を申請し、参詣しなさい」と推奨したこともあって、伊勢神宮や本願寺への参詣熱が高まっていたのであろう（『福井県史』通史編4近世二）。

「留書」にみられる旅行者はすべて男性であったように、当時男性が他国へ旅に出ることには、それほど厳しい規制はかけられていなかった。貞享3年1月に福井藩が出した法度には、「商いや参宮・湯治、その他の用事で他国へ行く者は、村庄屋に断りを入れ、組頭（大庄屋）のところで吟味した上で、だいたい帰国の予定を提出してから出国せよ」（3503）と定められている。「留書」に綴られた文書は、まさにこの福井藩の法度にみられる手続を踏んだ移動届であったといえる。なお、毛利藩では万治4（1661）年以降は町年寄や庄屋目代などの手形があれば出国してよいと定められ、岡山藩では元禄3（1690）年に往来手形の雛形が示されているように、この届けを受けた野中組の組頭は、旅人に「往来手形」なるものを発行したと考えられるが、残念ながら「小島家文書」のなかには残されていない。病気の旅人を宿場から半強制的に追放することを禁じ、病人を宿場で世話して国元への連絡を取ることを義務づけた元禄1（1668）年発令の江戸幕府の「生類憐み」政策を受けて、往来手形は旅人の保護・救済のために、幕府や藩側の主導で所定の様式に整備されていくが、それより以前から地域社会においては、旅人の身元を保証する証明書として携帯されていたという（柴田純『江戸のパスポート』）。福井藩の法度や「留書」の移動届にも「旅先に居留したり病気になったりした者は村として呼び返す」と定められていることから、野中組の村人たちも、何らかの身元証明書を携帯して旅に出ていたことが予想されよう。

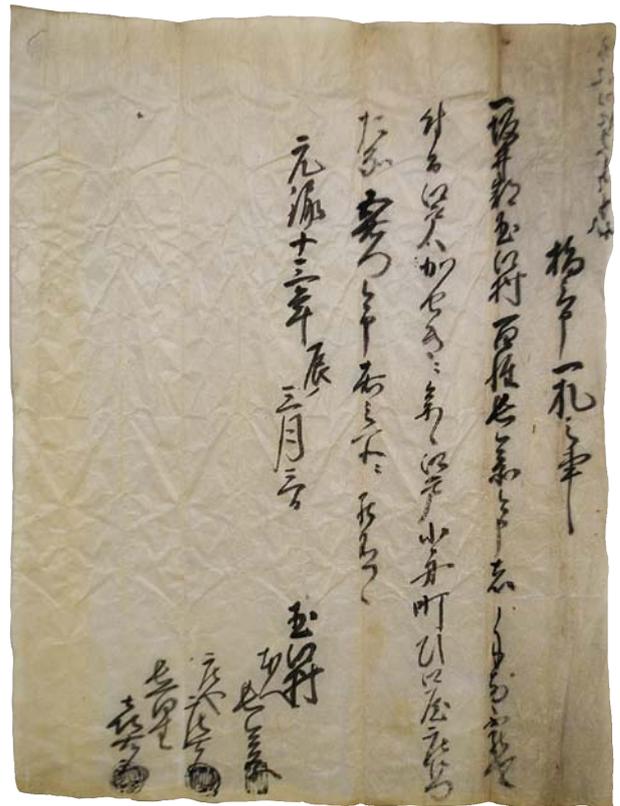
短期間であれば、旅行も比較的容易だった江戸時代の男性に比べて、女性の旅の場合には、幕府の関所や藩の口留番所^{くちどめ}を通過するための手形を発行してもらわなければならなかった。これは、女性を「留物」としてその通行を取り締まることにより、百姓の領外への流出を防ごうとした幕藩国家の政策によるものであったという（深井甚三『江戸の旅人たち』）。「小島家文書」には、福井藩が設置していた「板取」の口留番所を通過して旅をした女性たちの「通手形」も数多く残されている。

貞享3年閏3月、福井藩の領地の半分が召し上げ

られた「貞享半知」により、野中組は福井藩領から幕府領に編入された。そのため、貞享3(1688)年8月6日、清家村の尼ちしゆは、板取の口留番所を通過する手形を、当時勝山に置かれていた幕府領代官陣屋から発行してもらうために、庄屋を証人として組頭に申請している(4296)。その目的は、伊勢神宮への参詣であった。当時、板取の口留番所は福井藩の管轄であったため、幕府領下の女性が板取を通る場合には、幕府領代官所から福井藩の町奉行所へ届け出て、町奉行所から手形を発行してもらう手続が必要であった(「御国他国諸事之部」,「松平文庫」)。尼ちしゆの申請書は、その第一段階である村から組頭への申請である。その後、別の事例ではあるが、村からの申請書を添えて、組頭から幕府領代官へ申請書が提出され(1504・1622・1942・1・2327)、最終的に代官所から福井藩町奉行に申請が上げられたことが確認できる(1409・1547)。その手続を経て、ようやく女性への通行手形が発行されたのである。

この申請書には、女性の年齢や髪型(剃髪か否か)、村名、家主との関係、そして旅の目的が明記されている。女性の一人旅もみられるが、たいていは20代から60代の女性2人以上、多くて8人程のグループで、伊勢神宮や本願寺への参詣、あるいは山中温泉への湯治を目的に旅をしていた(本川幹男「福井藩口留番所と女性の旅」、『福井県史研究』15号)。特に伊勢参詣は、鎌倉時代以来、貴族や武士を中心に流行し、室町時代には領主を通じて領内の百姓のあいだにも広まっていったという。しかし当時は、人びとが勝手に社寺にお参りに行けるわけではなく、参詣する際には、「御師」と呼ばれる案内者が参詣者を社寺に誘導し、祈祷や宿泊などの世話をすることになっていた。御師は今でいうところのツアーコンダクターのような役割をする者であるが、特に中世以来、みずから諸国へ出向いて檀那を集め、参詣を促していた伊勢の御師は、近世になるとその人数を著しく増やして精力的に諸国を廻り、伊勢参宮を急速に発達させていく。清家村の尼も、こうした流行に乗っての参宮だったのかもしれない。

しかし一方で、元禄期には村を離れて都市に向



元禄13(1700)年3月3日
「指上申一札之事(江戸かせぎ)」(No.2041)

かった人たちも大勢いた。元禄11(1698)年2月、今市村の市兵衛の母は、十年以上前に江戸に移住し、湯島天神近くの商人の店に居住している市兵衛に養ってもらうため、幕府が東海道に立てた遠江(静岡県)の今切関(新居関所)の通交手形を組頭に申請している(1958)。市兵衛が江戸へ移住した理由は定かではないが、元禄13(1700)年3月3日の玉江村長兵衛の証文には、「身前罷り成らず」、つまり困窮によって「江戸へかせぎ」に向かい、小舟町樋口屋の店子である五右衛門のところに住していると書かれている(2041)。元禄期は、村で食えない百姓が、多く農村から都市部へ流入し、都市下層民が増大した時期といわれているが、それは越前でも例外ではなかったようである。経済的に比較的安定した人びとが旅を楽しむ時代になっても、いまだすべての人が困窮から解放されたわけではなく、逆に経済格差の拡大が進んでいたのである。現代の日本も同様であるが、人びとの貧困と格差は、江戸時代の大きな社会問題でもあったといえよう。

私の推薦書

人としての成長に興味をもとう！

医学図書館運営小委員会 委員

繁田里美

しげた・さとみ

医療・教育を志す人、そして青年期真っ只中の学生さんへの必読本を2冊ご紹介したいと思います。これらの本を読み私自身も鬱々とした思いの原因や歩んできた道程で岐路に立たされた時の思いなど走馬燈の様に浮かび、なるほどこういう時期だったんだと納得し胸がすっとしたことを覚えています。なんでもっと早くにこの本に出合わなかったのだろうとも思いました。

私が所属する看護学科の学生さんは講義の時に紹介している本なので覚えている人もいでしょう。タイトルほど難しい内容ではなく、自分に置き換えて読むことで今までの成長とこれからの人生を考えられる本であると思います。

まず一冊目は服部祥子氏の「生涯人間発達論～人間への深い理解と愛情を育むために～」第2版（医学書院）です。

著書の冒頭に「人間はある時生まれ、ある時死ぬ。生と死の間の時間を一生涯と呼び、その間に人間は様々な人生体験をする。人間の一生は一回性であり、極めて独自のものであり2つと同じものはない。しかし各々が多様で全くかけ離れた存在か



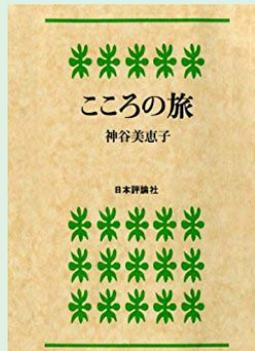
というそうではない。

一人ひとりが個性を持ちつつ身体的にも精神的にも多くの普遍性、一般性を共有し合っている」とあります。つまり人間の生きていく過程を深く考えている本です。皆さんエリクソンは知っていると思います。エリクソンは人間の一生を明瞭で一貫した展望をもって考察している優れた研究者で発達周期を8つに分けて説明しています。著者はエリクソンの理論を基盤に、最も現代的に精神社会面で変化の激しい思春期から青年期と最も長い時期を過ごす成人期をそれぞれ2期に分けて人生の周期を10段階で説明しています。それぞれの周期には常に心理社会的な課題と危機が包蔵されており危機の解決と発達課題が達成されていく中で基本的な人としての強さが（人格的強さ）獲得されていきます。これらは生涯が終わるまで徐々に進んでいきます。これらの事を知っているのと知らないのとでは生きていくうえでは大違い！！大きな岐路に立った時、真摯に自分の立ち位置を理解し周りを見渡し乗り切っていくことができるようになると思います。

2冊目は神谷美恵子氏の「こころの旅」（日本評論社）という本です。

この本は今から約45年前の1973年に8回にわたり「からだの科学」誌に連載された文章をまとめ直した本です。これも前書と同

じ様な視点ですが、人ひとりが育つこと、生き抜くことの複雑さはまるで奇跡であると捉えています。人生とは生きる本人にとって肉体や風土、社会、文化等々の影響は強い力を持っていますが、何よりも心の旅であると前置きしています。



内容は人生への出発から人間らしさの獲得、三つ子の魂、ホモ・ディスケンス、人間性の開花、人生本番の関所、はたらきざかり、人生の秋、病について、旅の終わりと、人の一生の心の旅をたどっています。身体にとって空気や水や食物が必要なのに同様に、心には生きる喜びが必要なことは一生を通じて変わ

らない。また生きている間に様々な人と出会い喜びを分かち合い、それを後から来るものに伝えていく。これこそが真の「愛」であり、心の旅の豊かさにとって一番大切な要素であると結んでいます。

医療や教育は対人援助を専門とする人たちです。対象者への目の前の問題だけを見るのではなく、その人の人としての存在や今まで歩んできた過程をも考えた対応が必要になってきます。自分あるいは対象者の過去・現在・未来と続く時間を視野に入れて考えることができます。また皆さんが人生を歩いていくうえで大いに役立つことは間違いないと思いますよ。

(医学部看護学科 臨床看護学講座
成人・老年看護学 准教授)

驚異のエピジェネティクス ～遺伝子がすべてではない!? 生命のプログラムの秘密

附属図書館運営委員会 委員
沖 昌也
おき・まさや

私は、エピジェネティクスの分野の第一線でご活躍されている、中尾光善先生の書かれた「驚異のエピジェネティクス」の本を推薦したい。具体例を挙げながら「エピジェネティクス」に関して一般の人にも分かりやすく書かれた本である。

みなさんは、「エピジェネティクス」という言葉を聞いたことがあるだろうか? ヒトは、受精の過程で両親から DNA を受け取り、コピーを作りながら分裂を繰り返し誕生する。つまり、

子供は 100% 親の持つ DNA の情報を受け継いでいる。従って「生命のプログラムとは何か?」と問われれば、ほとんどの人が「DNA」と答えるであろう。では、ここで 1 卵生の双子のことを考えてみよ



「驚異のエピジェネティクス」
著者：中尾光善
出版社：羊土社

う。1卵生の双子とは、全く同じDNAを持っており、いわゆる「クローン」である。確かに「バツ」と見た感じではそっくりに見えるが、ずっと一緒に過ごしている両親であれば2人の違いが分かり、別々にいてもどちらか区別が付くようになる。子供の頃は食事や生活環境が同じであるが、年齢が進んで、学校、職場、結婚、引越しなど生活の中身が段々と変わってくると双子のふたりに段々と違いが現れてくる。勿論、似ている面はあるが、生活習慣や社会経験に基づいたところが異なってくるのだ。例えば文書や絵の書き方、計算や運動の能力、考え方等が同じではなくなる。健康状態についても片方だけが特定の病気にかかることがある。医学的に一卵性の双子が注目されるのは、2人の違いを分析することで、どこまでが遺伝でどこからが環境によるのか客観的に考察できるからである。このように、同じDNAを持っているにも関わらず環境の変化などによって様々な違いが生じることを「エピジェネティクス」と呼んでいる。第1章「遺伝がすべてか」の項目では、前述した1卵生の双子など、様々な「エピジェネティクス」の具体例が述べられている。

上記では、一卵性の双子を例にあげたが、ヒトの身体が作られていく仕組みにも「エピジェネティクス」が関わっている。もともとは1つの細胞から分裂をスタートして、目、鼻、心臓、肝臓、腎臓、骨、神経など、約200種類以上の多種多様の細胞が形成され、ヒトが形作られる。基本的に全ての細胞が同じDNAを持っているのに、なぜ、それぞれ異なる組織、器官等が出来上がってくるのか？生物を勉強した人であれば一度は疑問に持ったことがあるのではないだろうか。第2章では少し専門的な内容が含まれているが「遺伝子とゲノム

の印づけ」というタイトルで、DNA非依存の「エピジェネティクス」のメカニズムについて説明している。

第3章では「生まれつきの病気はどう起こるか」というタイトルで、親からの刷り込み現象である「インプリンティング」について触れている。「インプリンティング」もまた、「エピジェネティクス」の代表例である。

第4章では「万能細胞と臓器をつくる」というタイトルで京都大学の山中先生がノーベル生理学・医学賞を受賞された「iPS細胞」の例を中心に、再生医療とエピジェネティクスに関して述べられている。

第5章では「がんというプログラムの異常」というタイトルで、DNAの変異による「遺伝性のがん」とは異なり、「エピジェネティックな異常によるがん」について、統計的なデータも含め述べられている。「エピジェネティクス」の分野がここ数年で注目を浴びるようになった原因の1つは「がん」との関係性が明らかになったことであろう。

第6章では少し視点を変え、「食事はメモリーされる」というタイトルで、一般の人にも馴染みの深い「食事」、「健康」、「肥満」などをキーワードに「エピジェネティクス」との関係性を述べている。

第7章では「ストレスと脳の働き方」というタイトルで、「記憶」と「学習」の視点から「エピジェネティクス」との関連性が記載されている。個人的には、この分野に特に興味を持っており、まだまだ分からない点も多く、これから次々と疑問が明らかにされていくであろう「ホットな分野」で、特にお勧めの章である。

最後の第8章では「診断と治療につなぐ」というタイトルで、続々と開発される「エピジェネティクス」の分野の新技术で、従来と

は異なる「治療法」及び「治療薬」に関して述べられている。

このように、「エビジェネティクス」は様々な現象に関わってきており、ここ数年で飛躍的に研究人口の増えた分野であり、「新たな医

学の道を切り開く分野」と言っても過言ではない。この本を読んで「エビジェネティクス」を身近な物に感じて欲しい。

(学術研究院 工学系部門 生物応用化学分野 准教授)

無知の知

Scio quod non scio. I know that I do not know.

附属図書館運営委員会 委員

坂田 登

さかた・のぼる

The safest general characterization of the European philosophical tradition is that it consists of a series of footnotes to Plato.

Alfred North Whitehead, *Process and Reality*, p.39 [Free Press, 1979]

ここに引用したホワイトヘッドという20世紀の哲学者、数学者の言葉を読めば古代ギリシャの哲学者プラトンがそれ以後の西洋哲学の伝統において如何に重要かということがわかんと思います。そのプラトンが若き日に会って、まさしくその人生を変えてしまう

ような大きな影響を受けたのがソクラテスでした。しかしソクラテスはアテナイの市民たちから裁判に訴えられ死刑の判決を受けて自ら毒杯をあおって死んでゆきます。その裁判での彼の弁明を描いたのがこの『ソクラテスの弁明』というプラトン初期の著作です。

そもそも、いったいなぜソクラテスは裁判に訴えられることとなったのでしょうか。このことには当時のペロポネソス戦争直後の政治情勢も関連していたのですが、何よりも多くのアテナイ市民から恨みをかけてしまったことが大きな原因のようです。『ソクラテスの弁明』に記されたその経緯というのは次のようなものです。カイレポーンというソクラテスの友人がある日デルポイの神（アポローン）から「ソクラテスより知恵のあるもの誰もいない。」という神託を受けたと言います。しかしソクラテスは、「いやそんなはずはない。私は自分が知恵のあるものではないことを自覚している。それなら神はいったい何を言おうとしているのか。」とこの謎を解こうと考えます。そこで彼はある政界の人のもとへ行き彼



プラトン『ソクラテスの弁明』
新潮文庫、岩波文庫、岩波プラトン全集他

を調べ上げ、「ほらこの人の方が私よりも知恵があるでしょう。」と神託を反駁することを試みます。しかし問答しているうちに、彼は多くの人たちから知恵のある人物だと思われ、また自分でもそう思い込んでいるらしいけど、実はそうではないのだ、と思われるようになりました。そこで彼に、自分には知恵があると思っているけれども、実はそうではないのだということを、はっきりわからせてやろうと努めました。しかしその結果、ソクラテスはその男からも、またその場にいた多くの人たちからも憎まれることになってしまったのです。そして一人になって考えてみると、「この男は知らないのに知っていると思っているが（無知の無知）、しかし私は知らないから、その通り知らないと思っている（無知の知）。そのちょっとしたことで私の方に知恵があることになるらしい。」と思われました。それから彼は悲劇作家や手に技能を持つ人たちなどを訪れ同様の問答を試みました。しかしいずれの場合でも結果は同じでした。こうしてソクラテスは多くの人たちから恨まれてしまうことになり裁判にかけられることになりました。

しかしここで彼が見出した「無知の知」の自覚こそは、あらゆる学問、真理の探究の出発点となるべきものでした。これこそが知を

愛すること即ち哲学の原点です。（古代ギリシャにおいて哲学とは今と違って数学や自然科学を含むあらゆる学問、知的営みの総称でした。）ですから大学においてもこの「無知の知」の自覚というソクラテスの精神はしっかりと受け継がれていなくてはなりません。しかし現在の大学においてこのような精神はしっかりと自覚されているでしょうか。大学で教えている先生たちの中にも、実は知らないのに、自分は知っていると思い込んでいるような人たちはいないでしょうか。私たちがまたソクラテスによる吟味を受ける必要があります。例えば、教育学を教えている先生が実は人を教育するとは一体どういうことか分かっていなかったり、心理学者が人間の心のことについて一番理解していなかったり、医学部の教授が自分の処方している薬のことを正しく知らなかったりというようなことはないでしょうか。

さらに『ソクラテスの弁明』では何よりも精神をすぐれたものにすべきこと、死は恐れるべきものではないことなどが論じられ、知を愛する人間の生きるべき模範が示されています。『ソクラテスの弁明』は大学で学ぶ人たち全員に読んでもらいたいと思います。

（教育学部 社会系教育講座 教授）

総合図書館企画展示2016

展示ケースってどこ?と思われる方も多くいると思いますが、1F メディアコモンの入口の右側(郷土資料室の前)に大きなガラス張りのスペースがあるのをご存知でしょうか。そこに年に4回程度、福井大学総合図書館に所蔵する資料を中心に展示しています。

◆「ご存じですか? 福井ゆかりのこの人物を」

福井ゆかりの人の中から、松平春嶽・由利公正・橋本左内・グリフィス・山川登美子をあげて、関連図書を展示しました。資料は「春嶽公手記維新前後逸事史補(筆写本)」「啓発録」「Mikado's Empire」などを展示しました。



◆ 福井の歌人

橘曙覧、山川登美子、俵万智を取り上げました。福井大学総合図書館所蔵の橘曙覧の和歌「くろむよは つひにあらじな しら玉の うるはし玉は くりにすれども」の短冊をはじめとして、山川登美子の「恋衣(復刻版)」、俵万智の「サラダ記念日」などを展示しました。



◆ 学生作品展示(福井県デザインコンクール入賞作品+創作絵本)

学生さんの作品を展示しました。ひとつは福井県デザインコンクール入賞作品吉田夏菜さんの「Dear the World」、もう一つは亀井夢乃さんの創作絵本「The Seven Colors」を展示させていただきました。絵本のあらすじは「ある町の画家が、自分の想像力だけで一人絵を描いていました。しかし、突然絵を描かなくなってしまいます。そのことを町の人々が寂しく思い、画家を町の外へ連れ出します。これまで見たことがなかった様々な景色や出会いに触れ、新しい絵が完成します。」というものです。



◆ 明治大正昭和初期の絵本・漫画

総合図書館には「福井パック」というものがあります。これは明治40年(1907)に創刊され、福井県の政治や経済を風刺した漫画雑誌です。これと同時に復刻版ですが、明治・大正・昭和初期の絵本を展示しました。



ミニ展示

の場所は、図書館の入館ゲートを入ってすぐ左側と3階閲覧室の中になります。新着図書とともに年に数回、テーマごとに本を展示しています。図書館スタッフ、または図書館サポーターと協力して展示しています。ほかには総合図書館のラーニングアドバイザーもオススメ本の展示をしています。できるだけ、図書館の本を紹介して活用してもらいたいと思っています。



春には新入生向けに“新生活応援”というテーマで「はじめての福井」「はじめての一人暮らし」の図書を展示しました。



“いろいろな仕事をのぞいてみよう”いろいろな仕事を覗き見できる本を集めてみました。



“オリンピック”2016はオリンピック年でしたね。関連本を集めてみました。



“レトロな本”書庫から装丁がレトロなものを選びました。発行当時の装丁で復刻されているものもあります



オープンキャンパスでは理系女子企画に合わせて理系女子のための図書を展示しました。



“気になる新書”話題のテーマ、面白いタイトル、有名な著者、おもしろ手にとりたくなってしまう新書を紹介しました。

“読書芸人のおすすめ本”アメトークという番組の読書芸人企画で取り上げられていた本を紹介しました。



“LAおすすめ本の展示”
専門書から読み物まで
選んでいます。



“あなたの心に響く
言葉”をテーマに図
書館サポーターが
本を展示しました。
心に響いた言葉を
ポップにしました。



ノーベル文学賞
の話題にいつも
のぼる村上春樹
さんの小説を展
示しました。



“映画になった本”
をテーマに展示
しました。映画
化された作品が
多くてびっくりで
す。



教員推薦図書の展示は
本に先生のコメントが
付いています。そのた
めか学生さんたちの興
味を引き、たくさんの
貸出があります。



今年は県立図書館のティーンズ特
集“ふくいの大學生なう”という
企画に参加し、本学学生がブック
ハンティングで選んだ本やラーニ
ングアドバイザーのオススメ本を
展示しました。



“気になる背表紙”
長い休みに読書はいか
がですか？背表紙を見
てピンときた本があれば
どうぞ。春休みのお
供に。

イベント企画

◆ 雑誌のリサイクル・学内向け不用本のリユース市の開催

不用雑誌や不用本の有効利用のためにリユース市をしました。4000冊ほどあった本のうち、1500冊ほどが学生さんや先生のもとへ引き取られていきました。4000冊を1Fのスペースに並べるのは大変でした。



◆ ブックハンティング

今年もブックハンティングを実施しました。文京キャンパスの14名の学生さんが参加し、様々なジャンルの本を選んでいただきました。図書館に無い本で学習などに必要な本や読んでみたい本があればWebからリクエストすることができます。



◆ Web of Science & EndNote basic 講習会

講師をお招きして論文検索・作成に必要なデータベース・文献管理ソフトの講習会を開きました。日頃の研究や論文作成などに有効活用していただけるとよいです。



◆ 福井大学きてみてフェア“和装本をつくろう”

10月16日に開催された福井大学きてみてフェアでは、昨年と同様に“和装本をつくろう”を実施し、大変好評でした。昨年とは紙のデザインも変わっているので参加された人の中にはリピーターもいらっしゃいました。



◆ クリスマス抽選会

はじめての試みです。12月12日～22日までの期間、学生さんを対象として1回の貸出で本を2冊以上借りた人にくじを引いてもらって、“当たり”がでたら、こちらで用意した賞品の中から好きなものを選んでゲットしていただくという企画でした。思ったより多くの学生さんが参加してくれました。

このほか福大写真部さんが写真を提供してくれたり、図書館のカレンダー入りしおりを作ったりしました。

以上、今年1年を振り返ってみました。このような展示やイベントを通して、利用者の読書へのヒントになったり、図書館を身近に感じていただけるとよいと思います。



医学図書館日記

展示 ミニ展示「新入生展示 ようこそ医学・看護の世界へ」

平成 28 年 4 月 5 日(火)～4 月 28 日(木)

新入生向けに、看護学・医学への誘い、大学での勉強方法、先輩からのリユース本、学生ブックハンティング、福井の医師「笠原白翁(良策)」、国家試験とは、等のコーナーを設け、大学での学び方を紹介し、新入生は新たな一歩を踏み出しました。



展示 ミニ展示「本屋大賞」

平成 28 年 4 月 13 日(水)～4 月 28 日(木)

平成 28 年度本屋大賞を受賞した福井県出身・在住の宮下奈都氏の特集展示を行い、本学の所蔵がない著書については、福井県内相互貸借サービス(Libox)を利用できることを紹介しました。



展示 ミニ展示「やるぞ卒論」

平成 28 年 4 月 19 日(火)～4 月 28 日(木)

卒論にとりかかる看護学科 4 年生向けに、卒業研究作成に関する図書を展示しました。



展示 ミニ展示「入学・進級から 1 ヶ月。ちょっとお疲れ気味なあなたへ ちょこっと元気のおすそわけ♥」

平成 28 年 5 月 2 日(月)～5 月 31 日(火)

入学・進級から 1 ヶ月が経ち、ストレス緩和、感情、癒し等、心に関連する図書を展示しました。



お知らせ 留学関係情報コーナーを設置

平成 28 年 5 月 19 日(木)～6 月 30 日(木)

国際課と連携し、留学関係情報コーナーを設置しました。関連本の他、随時、留学説明会の案内や留学パンフレットを閲覧することができます。



展示 ミニ展示「せっかくのひとり暮らしを豊かに過ごそう」

平成 28 年 5 月 23 日(月)～6 月 30 日(木)

県外出身者が多い医学部には、ひとり暮らしを初めて経験している人も多いことから、食事、家事、洋服などひとり暮らしだからこそ楽しめる内容の図書を紹介しました。

お知らせ ミニ展示「福井の魅力お教えします ～福井県ってどんなところ？」

平成 28 年 6 月 15 日(水)～9 月 30 日(金)

卒業後も福井に貢献してもらえよう、福井を愛してもらえよう福井県の魅力を伝える「福井県 PR コーナー」を 2 階閲覧室に開設しました。利用者に「あなたが知っている福井の魅力」と題して POP を作成していただきました。



イベント ブックハンティング 平成 28 年 7 月 25 日(月)～8 月 31 日(水)

学生図書委員の皆さんによるブックハンティングを開催しました。医学部は学内の勝木書店で実際に書棚を見ながら学生目線で選書します。今回は約 100 冊の収穫となりました。テーマを『もし医師という職業がなくなったら、我々は生きていけるのか』と題して、図書委員によるミニ展示も行われました。



展示 福井県立図書館連携展示「ふくいの大学生なう」

平成 28 年 8 月 1 日(月)～8 月 31 日(水)

県内大学生のお薦め本が一堂に会して展示され、医学図書館からも図書委員がブックハンティングして選んだ本を紹介しました。



イベント オープンキャンパス 平成 28 年 8 月 10 日(水)

松岡キャンパスのオープンキャンパスに伴い、医学図書館の紹介展示を行いました。訪れた高校生や保護者の皆さんは、医学図書館が 24 時間オープンしていることや、グループラボの環境、医学書に触れ、興味深く見学されました。



お知らせ 笠原白翁(良策)コーナーを設置

平成 28 年 8 月 10 日(水)～

種痘をいち早く取り入れた福井藩の蘭方医である笠原白翁(良策)について、命をかけて人々を救おうとした白翁の姿を紹介するコーナーを設置しました。福井医科大学学歌にも謳われています。



イベント EBMR 利用講習会 平成 28 年 9 月 12 日(月)

「科学的根拠に基づいた医療 (EBM)」に必要な情報を提供するデータベース EBMR (Evidence Based Medicine Reviews) の利用講習会を、Wolters Kluwer 社のボリス ディアコノ氏を講師に迎え開催しました。このほか、UoToDate、CINAHL、PubMed 等のデータベース利用講習会を毎年開催しています。

展示 ミニ展示「2016 年 ノーベル医学・生理学賞」

平成 28 年 10 月 4 日(火)～10 月 31 日(月)

2016 年ノーベル医学・生理学賞の受賞に関連し、細胞生物学に関連する図書を展示しました。



お知らせ 芦原中・金津中生徒による図書館見学

平成 28 年 10 月 26 日(水)

芦原中・金津中の中学生 40 名による大学見学に伴い、医学図書館の見学も行われました。自動貸出返却装置やインターネットでの蔵書検索の体験や、グループラボの見学等、大学ならではの体験をしていただきました。解剖図に見入る姿も見られました。



展示 ミニ展示「世界エイズデー」

平成 28 年 12 月 1 日(木)～12 月 15 日(木)

12 月 1 日の世界エイズデーに関連し、エイズ、免疫に関する図書を展示しました。



お知らせ 新着雑誌コーナーを改装

平成 28 年 12 月 1 日(木)

1 階雑誌閲覧室の新着雑誌コーナーの書架を入れ替え、明るい空間でゆったりとソファでブラウジングできるよう改装しました。また、表紙が入口から見えるよう配置し、目的の雑誌にスムーズに辿り着けるようになりました。



展示 ミニ展示「学生のためのベッドサイドライブラリー」

平成 28 年 12 月 5 日(月)～平成 29 年 1 月 31 日(火)

年の瀬を迎え、聖路加国際病院名誉院長 日野原重明氏の薦める「寝る前の 30 分に読む古典」を紹介しました。



イベント クリスマスコンサート 平成 28 年 12 月 22 日(木)

医学部管弦楽団の学生さんによるクリスマスコンサートを開催。サンタやトナカイに扮した学生さんが素敵な音楽を奏でてくれました。「マスネー作曲『タイスの瞑想曲』」「クリスマスメドレー」「クリスマス・イブ」の3曲。美しい弦楽四重奏の音色に、一時の憩いの時間を過ごしていただきました。観客のみなさんには、マスクとミニ利用ガイドをプレゼント。



イベント 新春書き初め 平成 29 年 1 月 4 日(水)～13 日(金)

新年を迎え、「今年の抱負、未来への希望、フレッシュな気持ちで書き初めしよう」と題して、今年も書き初めコーナーを設けました。当初用意していなかった椅子まで希望があり、本格的に半紙と向き合う姿が。今年もみなさんの書き初めは、神社でお焚き上げさせていただきました。



イベント 国試応援メッセージ 平成 29 年 1 月 16 日(月)

今年も国試応援メッセージボードを設置しました。先生、後輩、職員から、たくさんのメッセージが集まりました。

この想い受験生に届け！心願成就！！全員合格！！



お客様 永平寺町立図書館協議会による図書館見学

平成 29 年 2 月 28 日(火)

永平寺町立図書館協議会 17 名による、医学図書館見学が行われました。自動貸出返却装置やインターネットでの蔵書検索の体験や、グループラボの見学等、地元の大学図書館、専門図書館としての機能を説明し、一般の方にもご利用いただけることを紹介しました。



お知らせ 英語論文作成支援コーナーを開設 平成 29 年 3 月 1 日(水)

1 階医学資料室内に、英語論文作成支援コーナーを開設しました。論文作成に役立つ参考図書や、文例ソフトを利用することができ、じっくり集中して論文作成をすることができます。今後、学内に PR していく予定です。



「英語論文作成支援コーナー」を 医学図書館1階 福井県医学資料室の一角に設けました！

これから英語論文を作成しようとする利用者向けに、論文作成に役立つ参考書や辞書ソフト等を揃え、書斎気分で見られるコーナーを設けました。利用する場合は、教職員の方は eOffice で予約をお願いします。学生の方は、図書館カウンターにお申し出ください。空き状況を確認し空いていれば利用できます。

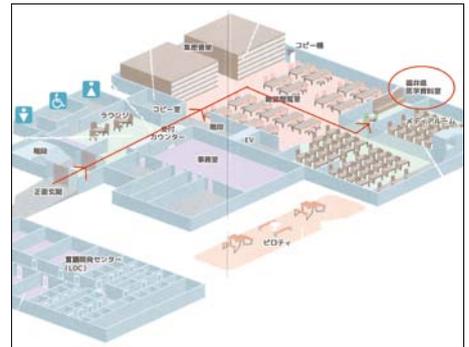
利用できるソフト

- ・MED-Transer V15 パーソナル (クロスランゲージ) (収録辞書) ステッドマン医学大辞典
研究社新英和辞典 第7版/新和英中辞典 第5版
- ・ライフサイエンス英語論文文例辞典 (カイナー)
- ・ステッドマン医学大辞典・医学略語辞典 (メジカルビュー)
- ・医学英語活用辞典 (メジカルビュー)

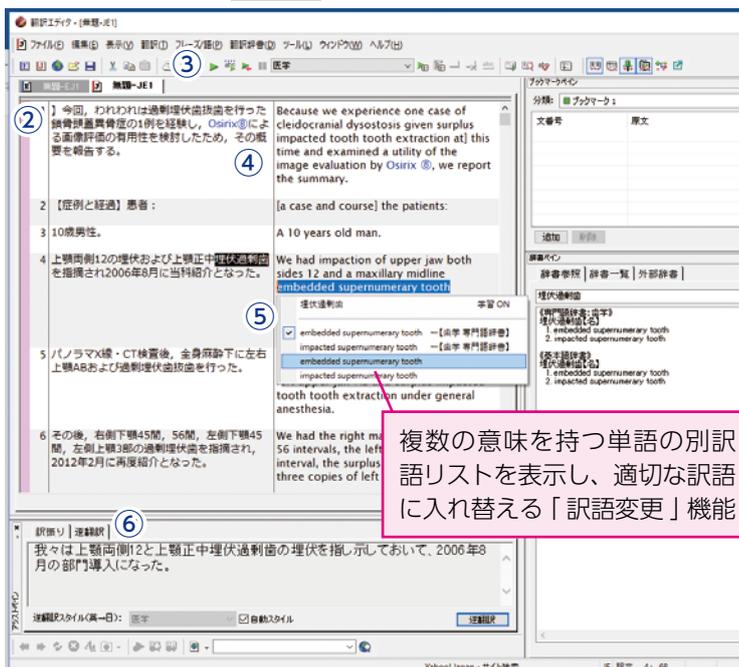


利用できる資料

- ・ An introduction to medical terminology for health care
- ・ The language of medicine
- ・ 科学論文の英語用法百科
= English composition for scholarly work
- ・ 英語医学論文の書き方がわかる本：知らなければ損をする！
- ・ 和英医学用語大辞典
- ・ 逆引き広辞苑 その他



利用例



MED-Transer を使って翻訳させます^①。

英語→日本語は「E」エディタ、日本語→英語は「JE」エディタを選択して、テキスト入力やファイルの読み込み等を使って、左側に原文を表示させます^②。

カーソルが文書の先頭にあることを確認して、ツールバーの▶をクリック^③すると、翻訳結果が表示されます。一文ごとに翻訳するので文章の確認がしやすくなっています^④。

文章のおおよその構成ができれば、訳語の変更^⑤や逆翻訳^⑥の編集機能を使ったり、他の専門用語辞典や文例辞典を調べたりしながら、訳文をブラッシュアップしていくことができます。

対応するファイルは Word、Excel、Power Point、XML、PDF です。Word、Excel、Power Point にはアドインが埋め込まれているので、MED-Transer を起動することなしに翻訳することができます。

また、インターネットを利用できるので、各種データベースによる文献検索やメールの使用も可能です。

お問い合わせ先：医学図書館カウンター (内線 松岡 2176)

平成28年度教員寄贈図書

総合図書館

教育学部芸術・保健体育教育講座 絵画

湊七雄 准教授

- 授業に活かせる版画ワークショップ
湊七雄著. -- 福井大学, 2012
- ノントキシック銅版画への誘い：ソフトグランド，ハードグランド，アクアチント
湊七雄，マルニックス・エヴェラルト著. -- 福井大学. 2016



教育学部言語教育講座 漢文学

澤崎久和 教授

- 杜甫全詩訳注 / [杜甫著]
下定雅弘，松原朗編；1. -- 講談社，2016. -- (講談社学術文庫)
ISBN: 978-4062923330

工学研究科機械工学分野専攻

川谷亮治 准教授

- 実験で学ぶメカトロニクス：TK400SH ボード実習
川谷亮治，高田直人著. -- 東京電機大学出版局，2016. ISBN: 978-4501331801



工学研究科原子力・エネルギー安全工学専攻

小高知宏 教授

- 機械学習（マシンラーニング）と深層学習（ディープラーニング）：
C言語によるシミュレーション
小高知宏著. -- オーム社，2016. ISBN: 978-4274218873

語学センター

中根貞幸 特命教授

- 人と言葉と表現：英米文学を読み解く
東海英米文学会編. -- 学術図書出版社，2016. ISBN: 978-4780605440



医学図書館

医学部感覚運動医学講座 脳脊髄神経外科学

菊田健一郎 教授

- 脳外科医マーシュの告白
ヘンリー・マーシュ著 -- 栗木さつき訳. -- NHK出版，2016. ISBN 978-4140817032



医学部国際社会医学講座 放射線基礎医学

松本英樹 准教授

- 放射線医科学：生体と放射線・電磁波・超音波
近藤隆 [ほか] 編集 -- 新版. -- 医療科学社，2016. ISBN 978-4860034818



ご寄贈いただきました先生方、誠にありがとうございました。これらの著書は、各館において個別コーナーを設け、広く利用に供させていただきます。皆さんどうぞご利用ください。

総合図書館…2階教員著書コーナー

医学図書館…福井県医学資料室

今後も御著書の寄贈にご協力いただきますようよろしくお願いいたします。

■ 主な行事等

2016.3.23 (水)

- 第 39 回附属図書館運営委員会
- ・ 今後の資料整備方針について
 - ・ メタセコイアの伐採について

2016.6.15 (水)

- 第 40 回附属図書館運営委員会
- ・ 平成 28 年度国立大学法人福井大学 年度計画について
 - ・ 自己点検評価小委員会について

2016.6.28 (火)

- 第 25 回総合図書館運営 WG
- ・ 平成 28 年度総合図書館予算配分 (案) について
 - ・ 資料の廃棄について (案)

2016.6.29 (水)

- 医学図書館運営小委員会
- ・ 平成 28 年度医学図書館予算配分 (案) について

